

小学校国語科話し合い学習における「応じて話す力」を育てるための 指導と授業実践に関する研究

授業実践者 渡邊奈津子

1 学年

小学校6年生

2 学習材名

「わたしたちの学校改善計画」(全10時間)

3 学習材の目標

- ・話し合いに対する認識を深め、話し合うことの意義に気づく。
- ・話し合う力と「応じて話す力」を理解し、それを使って話し合うことができる。
- ・友達の提案を聞き、質問や意見交換によって話し合いを深めることができる。

4 授業で育てたい力

4.1 小学校高学年で身に付けさせたい話し合う力

本研究では、村松賢一〔2001〕の「対話能力」を参考にし、小学校高学年の児童に身に付けさせたい話し合う力を図1のようにまとめる。小学校高学年の児童に身に付けさせたい話し合う力には、①話し合いに意欲と関心をもって参加する情意面の要素と、②話し合うための話す力・聞く力、相手の発言に応じる力、司会をする力などの基礎的基本的な技能面の要素と、③思考力や話し合いの方法やルールなどを知る認知面の要素とが必要である。これら3つの要素が相互補完的に働くことによって話し合いが成立する。

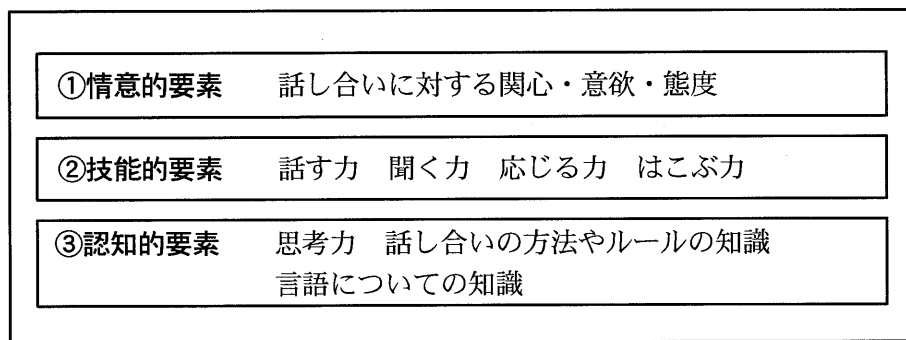


図1 小学校高学年で身に付けさせたい話し合う力

話し合い学習指導を通して、児童が図1に示したような話し合う力を身に付け、話し合いにおいて次のような姿になることを目指す。

- 話し合いの意義に気づき、生活の中で進んで話し合いに参加しようとする。
- 他者の意見や考えを聞いて、自分の意見や考えと比べながら関連づけて意見を述べる
ことができる。
- 他者の意見や考えに対して、批判的に考え、質問や反論ができる。
- 他者の意見や考えから、新たなものの見方や考え方をもちたり、生み出したりできる。
- 話し合い学習を通して学んだことを認識し、自分の成長に気づく。

4.2 話し合いに必要な「応じて話す力」

図2の上部に示すように、話し合い学習指導の方法を、図1で示した話し合う力をもと

にして、話し手と聞き手が双方向的なやり取りを繰り返して話し合いを展開するために特に必要な要素である②技能的要素の「話す力」「聞く力」「応じる力」と③認知的要素に焦点を絞って提案する。

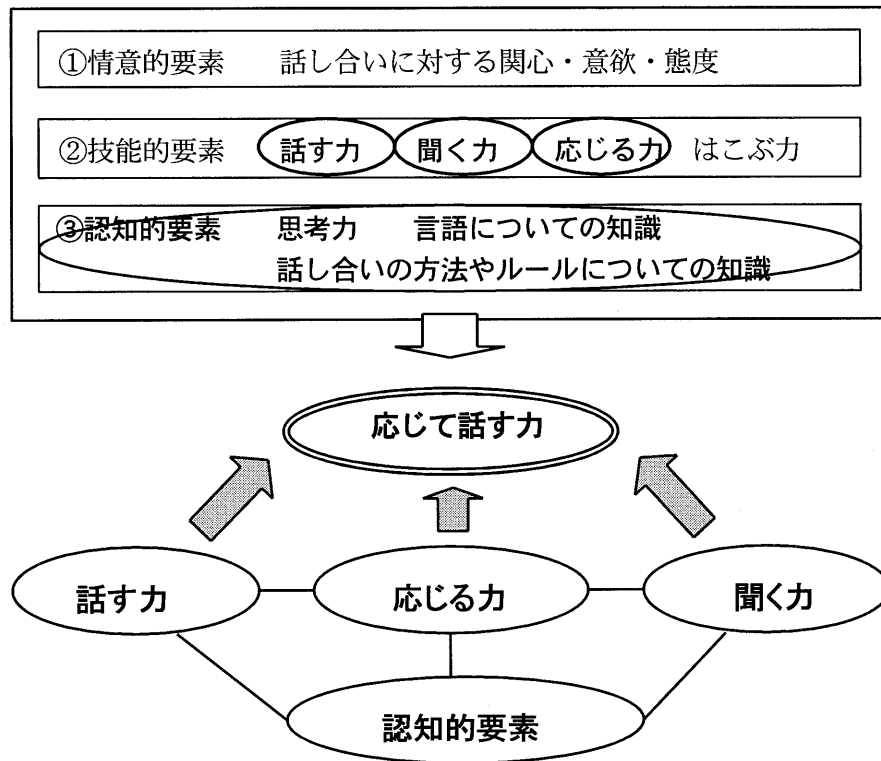


図2 「応じて話す力」の要素の関係

話し合う力から取り出した②技能的要素の「話す力」「聞く力」「応じる力」と③認知的要素の関係を図に表すと、図2の下の部分のようになる。児童の認知に注目し、③認知的要素の部分をも深く捉え、それをベースに②技能的要素の「話す力」「応じる力」「聞く力」を加えたものを「応じて話す力」として捉える。また、「応じる力」は、「話す力」「聞く力」のそれぞれと結びつくことによって、「応じて話す力」として発揮される。

「応じて話す力」とは、「話し手の発言に応じて、自分の意見や疑問点などを考えて話す力」のことで、相手の発言内容が理解できて、それに対する自分なりの考えや意見をもてることとともに、相手に返す発言につなげられることを目指すものである。具体的な目標として、次の3点を挙げる。

- ・相手の発言を批判的に捉え、不備について質問や反論をする。
- ・相手の発言のよいところを認め、賛成意見や発展的な意見を話す。
- ・自分の考えをしっかりと持ち、それと相手の意見や考えとを比べて自分の意見や考えを話す。

次に、「応じて話す力」を話し合い場面で使うときの様子を、聞き手を主体にして表すと図3のようになる。話し手から聞き手に向かう矢印の部分に「聞く力」が、聞き手から話し手に向かう矢印の部分に「話す力」が働き、発言から聞き手を経て意見・質問・反論に向かう矢印の部分に「応じる力」が働く。

「応じて話す」ためには、図3において、まず、話し手の発言内容を理解するための「聞く力」④と話し手の発言に応じるための「聞く力」⑤が必要である。続いて、話し手の発

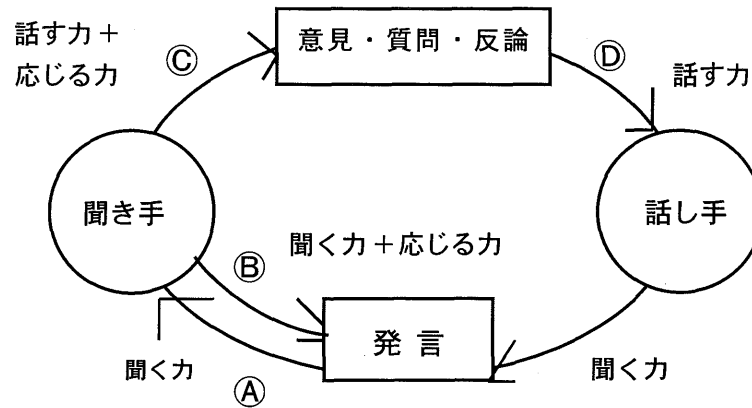


図3 話し合い場面での「応じて話す力」

言に応じるために相手の発言を批判的に捉え、意見や質問、反論を考える「話す力」◎と、さらに、それを自分の言葉で相手に伝える「話す力」④が必要である。「応じる力」は③と◎の段階で必要な力である。①と③の「聞くこと」が確実にできることが、◎と④の「話すこと」を可能にする。「応じて話す力」は「聞く力」をベースとして「話す力」があり、その「聞く力」と「話す力」が基礎となって「応じる力」と結びつくことにより発揮される。そして、「聞く力」「話す力」と「応じる力」とを結びつけるために批判的思考や創造的思考などの思考力が深くかかわってくる。

5 授業の構想

5.1 社会的構成主義に基づく話し合い学習の流れ

正司和彦〔2004〕は、正統的周辺参加や最近接発達領域の考えに基づいた相互作用による児童の学習活動の流れを次のようにまとめている。

- ①学習の目的や動機を見だし学習共同体に参加する。
- ②新しい体験をしたり新しい知識にふれたりする。
- ③言語や文化的道具を媒介としたコミュニケーションを行い、知の獲得と理解の深化を行う。
- ④学習共同体において知識や考えを創りだし、共有化を行う。
- ⑤自分自身の知識や考えを再吟味し、学習を振り返り自己を認識する。

話し合い学習においても、正統的周辺参加という概念に基づいて学習を設計することにより、学習主体である児童が、共同的活動への参加形態の変化にともなって、児童の行為、児童自身による実践共同体の活動の理解、児童の自己認識を同時的に変化させていくことが考えられる。また、話し合い学習というコミュニケーション活動を軸にした学習においても、話し合う力についての理解を図ることを目的に、仲間との共同活動によって、メンバーの持つ最近接発達領域に互いに刺激を与え合い、理解を促進させていくことが重要になる。

本研究では、正司〔2004〕の学習活動の流れに基づき、児童が学習共同体のメンバーとして学習に参加し、そこへの参加の仕方を変化させながらより深く学習共同体の活動に関与するようになる話し合い学習の流れを構想する。そして、仲間との共同的活動を行い、相互作用によって話し合う力についての理解を深め、知識や考えを共有化する過程を経て、児童が自己の知識や考えを再吟味し、認識を深められるようにする。

このような児童の学習への参加の仕方と認知を考慮した学習活動の流れによって話し合い学習指導を行う。この学習の流れを図4に示す。図4中の丸数字は、正司〔2004〕の学

習の流れと対応させている。

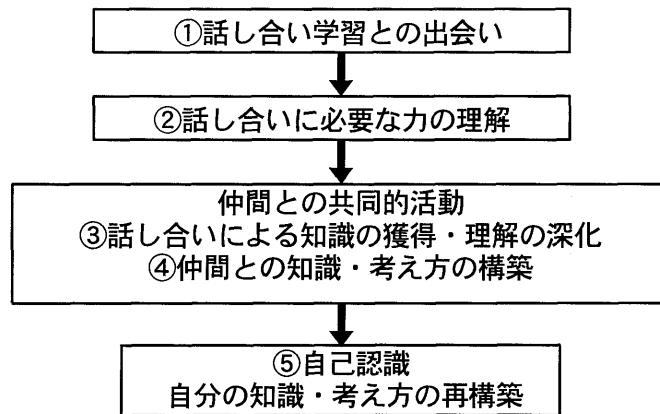


図4 話し合い学習の流れ(1)

初めに図4の①で、児童は話し合い学習と出会い、自分が学習の対象である話し合い活動とどのようにかかわってきたのか、また、どんな考えをもっているのかについて認識する。そうすることによって、児童は学習への目的や動機を見だし学習共同体に参加する。

次に図4の②で、話し合いに必要な力について理解し、自分自身の考えの枠組みを形成する。

続いて図4の③、④で、話し合い活動を行うことを通して、話し合いに必要な力についての理解を深める。その際、学習への参加形態を変化させながらより深く学習共同体の活動に関与できるようにする。さらに、話し合いの様子について話し合う時間を設け、相互作用によって友達と知識や考えを共有化し、理解を促進する。

最後に図4の⑤で、話し合い学習全体を振り返り、自分の知識や考えを再吟味し、自己の成長について認識する。

5.2 「応じて話す力」を育てる話し合い学習の授業

図4で示した話し合い学習の流れをもとに、小学校第6学年の学習材「わたしたちの学校改善計画」において、児童が「応じて話す力」を身に付ける話し合い学習の流れを図5に示す。

初めに図5の①で、話し合い活動についての経験やアンケート結果等から、自分が話し合いという学習の対象に対してどのようにかかわってきたのか、また、どんな考えをもっているのかについて出し合う。そうすることによって、児童が話し合い学習の必要性を感じ、学習の目的や動機を見いだせるようにする。

次に図5の②で、話し合い活動例をもとにワークシートを用いて学習し、「応じて話す力」について理解する。その際の指導は、「応じて話す力」の「聞くこと」と「話すこと」を児童の認知、すなわち、スキーマ構造に合った形で教材化して行う。「聞くこと」と「話すこと」のスキーマに基づいて「応じて話す力」を理解させるため、まず「聞く力」について理解させ、次に「話す力」について理解させた後、両者をもとにして「応じる力」の理解を図るようにする。

続いて図5の③、④で、「応じて話す力」を用いて話し合いを行い、「応じて話す」聞き方や話し方、話し合いの進め方ができていたか、また「応じて話す」とはどのようなことであるかを考え、「応じて話す力」の理解の深化を図る。その際、話し合うグループと話し合いを観察するグループとに分かれ、役割を交替することで形態を変化させながら学習に参加し、話し合いの様子について自己評価や他者評価を行う。また、話し合うグループの中にも司会者や提案者、報告者という役割を設け、それらの役割を担って話し合いに参加

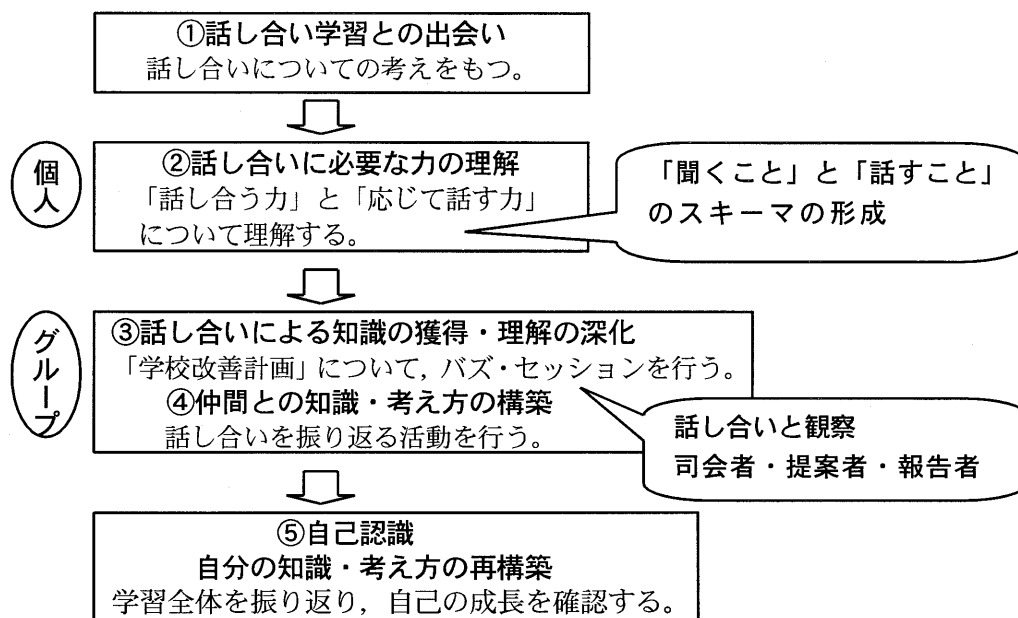


図5 話し合い学習の流れ(2)

することで、より深く実践共同体の活動に関与できるようにする。さらに、話し合いの後に、話し合いを振り返る意見交換の時間を設定する。「応じて話す」ことができていたか、「応じて話す」にはどうすればよかったかなどについて振り返り、相互作用によって「応じて話す力」についての考えや知識を共有化し、共同構築したり、自分自身の「応じて話す力」についての理解を促進したりする。なお、話し合いを振り返る意見交換には、電子掲示板を活用する。

最後に図5の⑤で、話し合い学習全体を振り返ってカードにまとめることで自分自身の知識や考えを再構築し、自己の成長について自覚する。

以上のような学習の流れによって、児童が話し合いにおける「応じて話す力」を身に付けることを目指す。この授業の全体構成を表1に示す。

表1 授業の全体構成(全10時間)

	学習段階(時数)	学習内容	参加形態
第一次	話し合い学習との出会い(1)	・話し合い活動についての経験やアンケート結果から、話し合い学習の必要性について考える。	個人
第二次	話し合いに必要な力の理解(3)	・話し合う力と「応じて話す力」について理解する。 ・「聞くこと」と「話すこと」のスキーマを形成するために、話し合い活動例とワークシートを使って学習する。	個人
第三次	話し合いによる知識・考え方の構築(5)	・「学校改善計画」について、バズ・セッションを行う。 ・話し合うグループと観察するグループに分かれ、交替して話し合い、自己評価や他者評価を行う。 ・話し合いの様子について、ペアグループで電子掲示板を使って意見交換を行う。	話し合うグループ 観察するグループ 振り返るグループ
第四次	自己認識(1)	・学習全体を振り返り、自己の成長を見つめ直す。 ・電子掲示板で、友達と意見交換をする。	個人 振り返るグループ

6 スキーマを形成させるための指導法

6.1 「応じて話す力」と「聞くこと」「話すこと」のスキーマ

本研究では、児童の認知に注目し、話し合う力の認知的要素の部分を深く捉え、それをベースに技能的要素の「話す力」「聞く力」「応じる力」を加えたものを「応じて話す力」として捉えた。児童がこの「応じて話す力」を身に付けるためには、「聞く力」と「聞く力」をベースにした「話す力」、それらに関連した「応じる力」と認知的要素を組み合わせたものを構造化して示し、児童がそれらの関係に分かる形にして学べるようにする必要がある。

そこで、認知科学で考えられているスキーマ理論を用いて、話し合いに必要な「聞くこと」と「話すこと」を構造化したスキーマを児童の頭の中に形成させる過程を組み込んだ話し合い学習指導を提案する。児童が主体的に「応じて話す力」についての知識を構成し、「応じて話す」ことを身に付けていくための方略としてスキーマ理論を活用し、本研究では、「聞くこと」と「話すこと」のスキーマを図6のように捉える。この図の①～④は、図3の①～④と対応している。

まず「聞くこと」のスキーマが作られ、次に、それに基づいて「話すこと」のスキーマが作られる。学習指導においては、両者に関連させながら「応じて話す」ことの理解を図る。また、「聞くこと」と「話すこと」とは関連している内容が多くあるので、先に「聞くこと」について指導し、その後に「聞くこと」の中で指導していない内容を「話すこと」として指導していく形を考える。

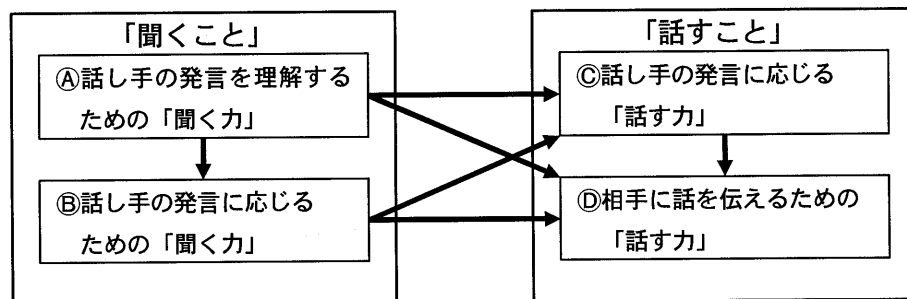


図6 「聞くこと」と「話すこと」のスキーマ

6.2 スキーマの形成を促すためのワークシート

本研究の授業では、前節で述べた「聞くこと」と「話すこと」のスキーマを児童の頭の中に形成させるために、図7のようなワークシート②を使って学習指導を行う。

このワークシート②は、児童が話し合い活動例を読み、その中の提案や提案に対する意見に対して自分ならどのような発言をするか考えるものである。話し合い活動例は、授業で行う話し合いと同様に児童から出された提案についてみんなで話し合っているものを取り上げる。この活動例の内容は、「海外えん助ボランティアに参加しよう」という議題で、一人の児童の提案「海外ボランティアへの参加」について学級会で話し合っているものである。

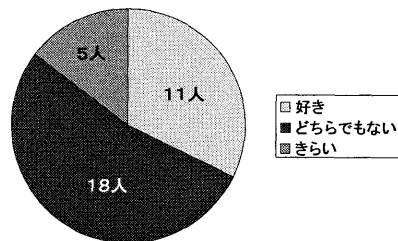
このワークシートを作成した意図は、児童が、次のような思考過程を経て発言内容を考えられるようにするためである。まず、「聞くこと」と「話すこと」のスキーマの①「事実と意見や考えを区別して聞く。」と「話し手の目的や意図をつかみながら聞く。」を使って話し手の発言内容を理解する。次に、②の「話の内容が本当かどうかを判断しながら聞く。」「根拠となる事実を検討しながら聞く。」「自分の考えと同じ点や違う点を考えながら聞く。」「話し手の考えに対する賛成・反対を考えながら聞く。」「新しい考えや異なる視点を得るように聞く。」という話し手の発言に応じるための聞き方をする。そのことによって、③の「話し手の発言のはっきりしない点について質問する。」「話し手の

や話し合いがうまくいかなくて困った経験などを学習カード①に書き出させた。

次に、学習カード①に書いたことを発表させ、児童が友達の気づきや経験を聞くことで自分たちの話し合いを行う際の問題点を認識するとともに、これまで特に考えることなく繰り返してきた話し合いという活動について見つめ直す機会にした。

次に、児童が話し合いに対してどんな意識をもっているかを自覚させるため、アンケート結果を提示した。話し合いが好きかどうかと好きな理由、きれいな理由、どちらでもない理由、話し合いは必要だと思うかどうかと必要な理由についてプレゼンテーションソフトを使って紹介した。「話し合いが好きですか。」「話し合いは必要ですか。」という問いに対する結果を図8と図9に示す。図8に示すように、クラスの約6分の5の児童が、話し合いが嫌いではないと思っている。また、図9に示すように、クラスの大半の児童が話し合いは必要だと感じている。

「話し合い」が好きですか。



「話し合い」は必要ですか。

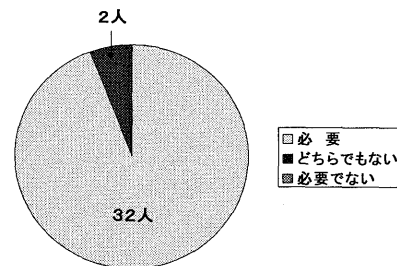


図8 児童の「話し合い」に対する意識① 図9 児童の「話し合い」に対する意識②

しかし、自分たちの話し合いを振り返ると上手にできていないという現実から、児童が話し合い学習の必要性に気づくようにした。一方、話し合いは面倒くさくて不必要なものだと思っている児童には、話し合いの必要性や意義を少しでも感じるきっかけとなるようにした。また、児童が挙げた話し合いが必要な理由を紹介し、話し合いは何のためにするのかを考えさせ、学習全体を通して育てたい話し合うことの必要性や意義に児童が気づくことへの伏線にした。

次に、教科書を読んで、学習材「わたしたちの学校改善計画」について学習していくことや学習の流れを説明し、児童に学習全体の見通しを持たせた。

最後に、本時の学習を振り返って、「話し合い」ということについて考えたことや思ったこと、これからの学習に対する心構えなどを学習カード①に書かせた。多くの児童が話し合いの大切さ、必要性についての考えを書いているものの、話し合い学習の必要性について書いている児童は2人だけであった。この学習の初めの考えと学習の終わりの段階での考えとを比べられるようにし、学習後に話し合いの必要性や話し合うことの意義の捉え方、話し合いに対する自分の構えなど、自己の成長や考え方の変容を確かめられるようにした。

7.2 第2次 話し合いに必要な力の理解 (3時間)

第2次は、児童が話し合いに必要な力と「応じて話す力」について理解することを目標に指導した。

〈第1時〉

本時は、児童が「話し合う力」と「応じて話す力」について知るための指導を行った。

まず、話し合いを上手に行うためにはどんなことが必要かを考えさせた。そのために、4月にとったアンケート結果の中の児童が考える「話し合いに必要な力」についてプレゼンテーションソフトを使って提示した。児童が考える「話し合いに必要な力」には、「他の

人の意見を聞いて自分の意見を言うこと、「考える力」、「相手の考えを理解する力」、「みんなの協力」、「相手の話をちゃんと聞いて、それに反応する力」など、この後学習していく「話し合う力」や「応じて話す力」に通じるものが多く出されていたので、これらをもとに、児童の考えと共通する点を示したり、児童の考えにはないが必要なものを加えたりしながら「話し合う力」や「応じて話す力」へつなげていった。写真1は、アンケート結果を使って指導する様子である。

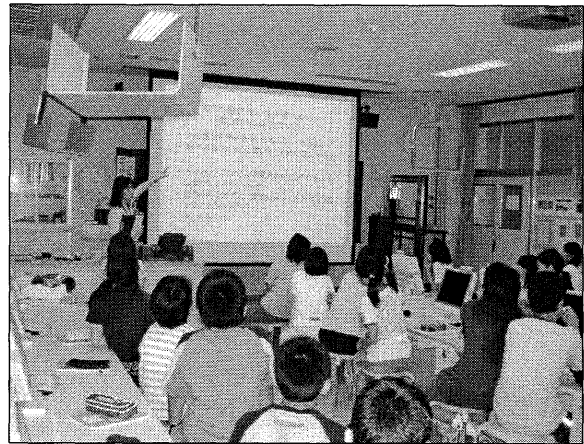


写真1 アンケート結果を紹介する様子

次に、プレゼンテーションソフトを使って、本研究の「話し合う力」と「応じて話す力」についての理解を図った。ワークシート①を配り、図10の「話し合う力」の3つの柱をスクリーンに提示した。技能的要素を「技」、認知的要素を「知」として示し、図

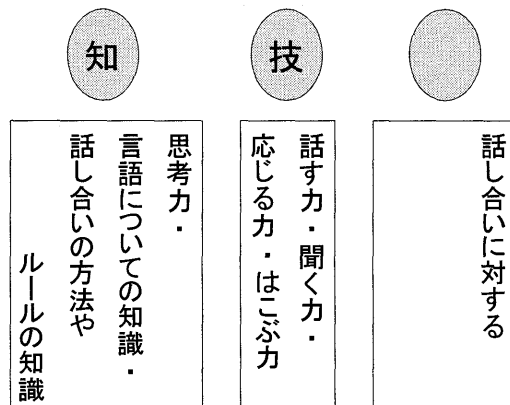


図10 「応じて話す力」

10の「技」と「知」の下に入る話し合いに必要な力の内容を児童に考えさせた後、提示した。情意的要素の「情」については、児童が学習全体を通して話し合いに対する関心・意欲・態度や話し合うことの意義について気づいていくことをねらうため、本時間中には知らせず、1つ目の柱に入る言葉を学習が終わるまでに考えておくことを課題とした(図10は空欄のまま)。続いて、「応じて話す力」とはどんな力かについて話し、話し合い場面で使われるときの様子について図11を使って説明した。ワークシート①に「聞く力」「話す力」「応じる力」を記入させながら、それらの力の関係とそこにかかわる思考力のことを説明した。話し合い場面で相手の発言に「応じて話す」ためには、まず、①話し手の発言内容を理解するための「聞く力」と、②話し手の発言に応じるための「聞く力」が必要であり、次に、③話し手の発言に応じる「話す力」、そして、④相手に話を伝えるための「話す力」が必要である。よって、相手の発言に応じて話すためには、「聞く力」が基礎になり、その上に「話す力」が必要となること、「応じる力」は、③④の「聞くこと」と「話すこと」にとって必要な力であることを説明した。

さらに、「聞く力」と「話す力」の関係図を使って、「応じて話す」ための「聞くこと」「話すこと」(スキーマ)について説明した。ここでも、「聞く力」を基礎として身に付けることが「話す力」を身に付けることにつながることを強調して説明した。

図10の「話し合う力」の3つの柱をスクリーンに提示した。技能的要素を「技」、認知的要素を「知」として示し、図10の「技」と「知」の下に入る話し合いに必要な力の内容を児童に考えさせた後、提示した。情意的要素の「情」については、児童が学習全体を通して話し合いに対する関心・意欲・態度や話し合うことの意義について気づいていくことをねらうため、本時間中には知らせず、1つ目の柱に入る言葉を学習が終わるまでに考えておくことを課題とした(図10は空欄のまま)。

続いて、「応じて話す力」とはどんな力かについて話し、話し合い場面で使われるときの様子について図11を使って説明した。

ワークシート①に「聞く力」「話す力」「応

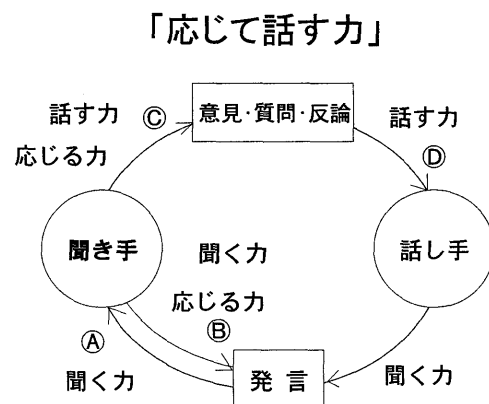


図11 「応じて話す力」

また、「応じて話す」ための具体的な聞き方、話し方について、教科書の話し合い活動例を使って説明した。教科書の話し合い活動例は、提案者からの「学校ごみ0作戦」という提案を受け、その提案を採用するかどうかを学級会で話し合っているものである。聞く力、話す力それぞれの項目について、どのように聞いたり話したりすることか具体的に説明した。例えば、「話の要点や中心点を押さえながら聞く。」という項目についてであれば、話し合い活動例から話し手の話の要点や中心点を拾い出して示し、それを押さえて聞くことであるというようにして確認した。

最後に、本時の学習を通して「応じて話す力」とはどんな力のことか、分かったことや考えたことを自分の言葉でまとめさせ、ワークシート①に書かせた。「相手の発言に対して、発言内容を理解し、自分の意見や考え、質問などを考えて発言する力」という内容のことを、児童に自分の言葉で表現させた。自分の言葉での表現により、「応じて話す力」の理解の様子を把握することをねらった。児童がワークシート①に書いた内容の一部を図12に示す。

【自分の言葉でまとめた「応じて話す力」】

〔児童Bイ〕話し手の言っていることに対してははっきりしていないところについて質問する。発言に自分の経験も加えて話す。

〔児童Cウ〕相手の意見に対して、反論したり、質問や新しい意見を出したりする力。また、相手の気持ちを考えて話すことも大切。

〔児童Cエ〕応じて話す力とは、その話したことにに対して、きちんと答えられるような話し方のことを言うんだと、私は思います。

〔児童Dイ〕他の人の意見を聞き入れ、理解した上で、反論、賛成をする。そして、分かりやすく発言する。

図12 児童がワークシート①に書いた「応じて話す力」

〈第2時〉

本時は、児童が「応じて話す」ための聞き方、話し方を理解できるように、話し合い活動例とワークシート②を使って指導した。これは、「聞くこと」と「話すこと」のスキーマの形成を促すためのワークシートを使った学習指導である。

まず、話し合い活動例を読んで提案の内容や話し合いの様子をつかませた。そして、「聞く力」と「話す力」の関係図を示しながらワークシート②で学習する内容を説明した。

次に、ワークシート②の問題を1問ずつ、児童が考える時間と答え合わせの時間を交互に取りながら進めた。発言内容を考える問題では、話し合い活動例の発言を参考にしながら、話し手の発言に対して自分ならどのように応じて話すかを考えてワークシート②に記入させた。児童が発言を考えている間に机間指導を行った。

〈第3時〉

本時は、児童が話し合いにおける「応じて話す力」について自分のレベルを認識し、次時から行う話し合いの目標を持つための指導を行った。

学習指導要領の小学校高学年では、「目的や意図に応じ、考えた事や伝えたい事などを的確に話すことや相手の意図をつかみながら聞くことができるようにするとともに、計画的に話し合おうとする態度を育てる」ことを目標にしている[文部省 1999]。この目標の「話すこと」と「聞くこと」は、「聞く力」と「話す力」の関係図における⑩の「話す力」と⑨の「聞く力」に相当する。しかし、話し合いにおいては、⑩の「聞く力」と⑨の「話す力」も必要な力であり、教科書でも扱っている内容である。

本授業では、次の9つを到達目標とし、その次の3つについては向上目標とすることを児童に伝えた。

- 到達目標
- ④・事実と意見や考えを区別して聞く。
 - ・話し手の目的や意図をつかみながら聞く。
 - ⑤・話の内容が本当かどうかを判断しながら聞く。
 - ・根拠となる事実を検討しながら聞く。
 - ・自分の考えと同じ点や違う点を考えながら聞く。
 - ・話し手の考えに対する賛成・反対を考えながら聞く。
 - ⑥・話し手の発言のはっきりしない点について質問する。
 - ・話し手の発言の十分でないことについて反論する。
 - ・話し手の発言と比べて自分の意見や考えを話す。
- 向上目標
- ⑦・新しい考えや異なる視点を得るように聞く。
 - ⑧・話し手の発言に自分の経験などを付け加えて話す。
 - ・新しい考えや異なる視点を生み出して話す。

次に、前時までの学習から、話し合いにおいて自分にはどんな力が足りないのか、苦手とする部分はどこかを自覚させるため、④～⑥のどこまでができていてどこからができていないのか、自分が苦手としていることは何かを学習カード②に書き出させた。そして、書き出したことをもとに、自分が本授業で身に付けたい力を挙げさせ、話し合いを行う際の目標を持つようにした。

次に、話し合いを行うための準備として、児童全員に学校改善計画案を考えさせた。教科書の例をもとに、各自が考える学校改善計画の理由や方法などを提案メモにまとめさせた。その中から、教師が話し合いの議題として使えると判断した改善案を各グループ2つずつ選んだ。

〈「応じて話す力」理解度テスト〉

第2次までの学習が終わったところで、「応じて話す」ための聞き方、話し方について図やワークシートで指導したことによって、児童が「応じて話す」ための方法を理解できているか確かめるため、理解度テストを行った。テストの内容は、④⑥の「聞くこと」をもとにして⑧の「話すこと」につなげることができるかを調べるため、ワークシート②と同様に、話し合い活動例を読んで提案者の提案とそれに対する意見について応じて話す内容を考えるものである。テストの回答数は7つあり、回答1つを1点で採点した。児童にはテストの点数は示さず、点数は教師が児童の理解度を把握するための控えとした。テスト結果の点数別の人数を表2に示す。

表2 「応じて話す力」理解度テストの結果

点数(点)	人数(人)
2.5	1
3	1
3.5	6
4	6
4.5	2
5	4
5.5	6
6	6
6.5	2
合計	34

テストの結果、「応じて話す力」についての理解が十分でなかった(2.5点～3.5点)

児童8名に補充指導を行った。理解度テストの間違ったところについて説明し、児童に発言内容を考え直させた。

7.3 第3次 話し合いによる知識・考え方の構築（5時間）

第3次は、児童が「学校改善計画」について「応じて話す力」を使って話し合うことや話し合いの様子について話し合うことにより、友達とともに「応じて話す力」の理解を深め、考え方をつくることを目標に指導した。

〈第1時〉話し合いの準備

本時では、「学校改善計画」について話し合う準備をした。話し合う内容は、最上級生として学校をよりよくするためにできることの提案について、グループの提案者の提案がクラスで取り上げる議題として適しているか、提案のための具体的な方法をどうするかなどについてグループごとに話し合うものである。グループごとに選んだ話し合いの議題を表3に示す。

表3 グループごとの話し合いの議題

グループ	1回目の話し合いの議題	2回目の話し合いの議題
A	花だんに花を植えよう	外に飛び出せ大作戦
B	組別リレー大会計画	校内交通安全
C	ベルマーク回収計画	鷹の子森ボランティア計画
D	休み時間に外で遊ぼう計画	体力アップ計画
E	1年生とのふれ合い作戦	アルミ缶のリサイクル作戦
F	トイレのスリッパ整とん計画	全校で外へ出て遊ぶ作戦

まず、話し合いの形態として用いるバズ・セッションについて方法や進め方などを説明し、次のことを確認した。

- ・各グループ5～6名。
- ・司会者、提案者、報告者を立てる。
- ・時間は12分。
- ・話し合いの後、話し合った内容（どんな意見が出たか、結論は得られたか、意見は統一できたかなど）をクラス全体に報告する。

次に、第3次で行う話し合いについて説明した。A～Fの6グループに分かれて話し合いを4回行うこと、議題についての話し合いを2回行い、2回の話し合いの後にそれぞれの話し合いの様子について電子掲示板を使って意見交換することを伝えた。

次に、グループごとに司会者、報告者を決めさせた。2回の話し合いで、必ず司会者、提案者、報告者のいずれかの役割を経験できるようにした。

役割が決まったグループから、2回の話し合いについて、議題、グループ内の役割、提案に対する質問や自分の意見を話し合いカード①と③にそれぞれ書かせた。提案者以外の児童には、提案に対する質問や意見を「応じて話す力」を使って考えるようにし、提案者には、提案に対する質問を予想し、どのように答えるかを考えさせた。

話し合いを行う前に、司会者、提案者、報告者それぞれについて、役割の内容や心構えなどを指導するための時間と、児童が話し合いの目標を確認するための時間をとった。司会者には、グループの提案をクラスに取り上げるかどうかを話し合うという目的と進行や運営の仕方について指導した。提案者には、提案メモを詳しく作り直し、自分の考えを分かりやすく説明できるよう指導した。報告者には、話し合い後に、どんな意見が出たか、

グループの考えはまとまったかなどについて報告できるよう簡単なメモを取ることを指導した。児童が話し合いの目標を確認するには、「応じて話す力」チェックシートを用いた。児童一人ひとりに、1回目の話し合いで目標にする「応じて話す」ための聞く力、話す力の項目を赤で囲ませた。

〈第2時〉1回目の話し合い

AとD、BとE、CとFをペアグループにし、「学校改善計画」の1つ目の議題について、初めにA、B、Cグループが話し合い、D、E、Fグループが話し合いを観察した。写真2のように話し合いグループが円形に座る周りを観察グループが囲むように配置した。報告者は報告用カードを使って、報告のためのメモを取った。観察グループの児童は、観察カードに友達の発言のよいところ、アドバイスしたいことを見つけるとともに、自分ならどんなことを話すかを考えながら観察し、話し合いの様子への気づきについての記録と他者評価を行った。また、観察グループは観察者用の「応じて話す力」チェックシートを使って、観察する友達の「応じて話す力」について評価した。12分間話し合い、時間になったら話し合いの途中でも終了し、話し合った結果を報告者が簡潔に報告した。

次に、役割を交替してD、E、Fグループが話し合い、A、B、Cグループが話し合いを観察した。前の話し合いと同様に、12分間話し合い、話し合った結果を報告者が簡潔に報告した。

話し合いの後、児童は「応じて話す力」チェックシートと自己評価カードを使って、本時の話し合いについて自己評価を行った。

1回目の話し合いでは、全員が1回以上「応じて話す」発言をし、「応じて話す」ことについて理解を図りながら話し合いを行った。



写真2 話し合いをしている様子

〈第3時〉振り返る活動①

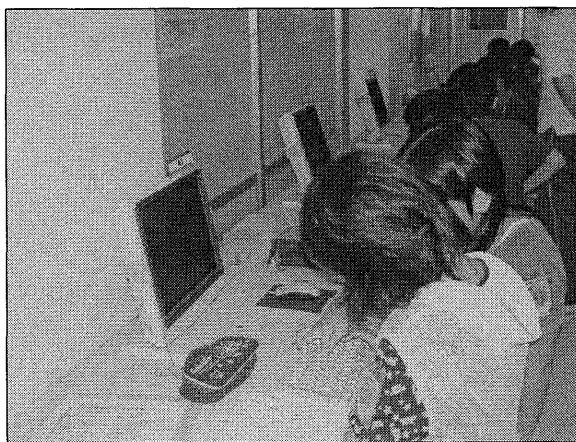


写真3 電子掲示板に書き込む様子

前時の話し合いの様子について、ペアグループごとに電子掲示板で意見交換をした。パソコンは1グループに3台ずつ割り当てたので、1台を児童1～2人で使用した。電子掲示板の画像を見せ、実際に操作をしながら使い方を説明した後、「応じて話す」ことができていたかどうかについて意見交換を行った。電子掲示板には、ログインした児童の名前が書き込まれるので、時間を区切り交替して参加した。パソコンの操作が苦手な児童は、友達に教えてもらいながら操作した。写真3は、児童が電子掲示板に書き込む様子である。

本時の終わりに、児童は、電子掲示板を使って意見交換した後の「応じて話す」ことについての自分の考えや、この意見交換で学んだことや気づいたことを話し合いカード②にまとめた。児童が話し合いカード②に書いた内容の一部を図13に示す。

【意見交換をして、学んだことや気づいたこと】
 [児童Cウ] 自分と友達も応じて話すことができていたと思う。特に、話し手の発言に対しての質問、反論がよくできていた。
 [児童Eオ] ぼくは、「話し手の発言と比べて自分の意見や考えを話す」ができていたので、賛成や反対を言えたのだと思います。
 [児童Fウ] 話し手の発言と比べて自分の意見や考えを話すことの理解が深まったと思います。
 [児童Fエ] 「話し手の発言の十分でないことについて反論する。」などがあまりできなかったので、次はがんばりたいと思う。

図13 児童が話し合いカード②に書いた内容

〈第4時〉2回目の話し合い

本時は、「学校改善計画」の2つ目の議題について話し合った。初めにD、E、Fグループが話し合い、A、B、Cグループが話し合いを観察した。次に、役割を交替してA、B、Cグループが話し合い、D、E、Fグループが観察した。1回目と同様に、12分間話し合った後、話し合った結果を報告させた。

事前に、児童は、1回目の話し合いから再検討した目標をチェックシートに赤で囲んでおき、話し合いの後に、「応じて話す力」チェックシートと自己評価カードを使って自己評価を行った。他者評価も1回目と同様に、観察者用の「応じて話す力」チェックシートと観察カードによって行った。

2回目の話し合いでは、1回目より「応じて話す」発言を増やした児童が多く、「応じて話す」ことについて理解を深めることができた。

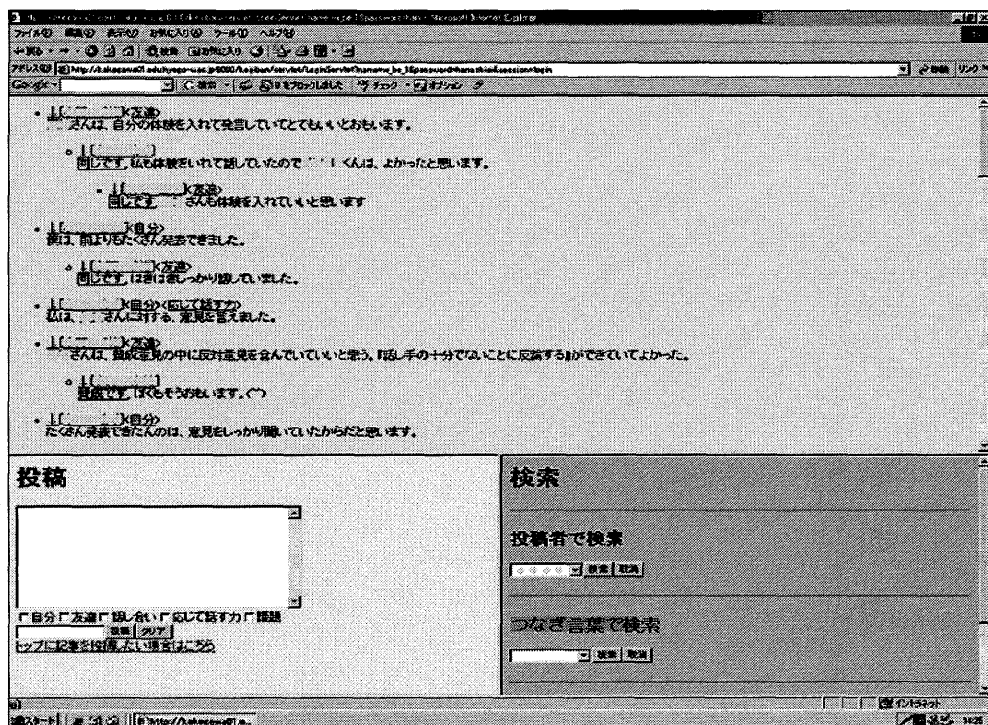


図14 電子掲示板の意見交換の画面

〈第5時〉振り返る活動②

本時は、2回目の話し合いの様子について、ビデオ録画を見て振り返った。その後、ペアグループごとに「応じて話す力」を使って話し合うことができていたかどうか、電子掲示板上で意見交換を行った。第3時と同様に時間を区切り、児童は2人で交替してパソコンを使った。電子掲示板での意見交換は、図14のような画面で行った。

児童は、電子掲示板上で意見交換をして、学んだことや気づいたこと、「応じて話す」ことについて深めた自分の考えを話し合いカード④にまとめた。児童が話し合いカード④に書いた内容の一部を図15に示す。

〔電子掲示板で意見交換をして、学んだことや気づいたこと〕

〔児童Aイ〕 ぼくが目標にしていた「話し手の発言と比べて自分の意見や考えを話す」ことができたと思います。

〔児童Dウ〕 質問の答えに対して、質問・反論すると、話し合い（応じて話す）がよく進むと思う。応じて話す力ができていない人は、反論や質問がなくなってしまい、話が進まないという意見が多かった。

〔児童Eオ〕 ぼくは、前の話し合いよりははっきりと話すことができたということを書き込んでくれた人がいて、みんなに向かって話せばいいことがわかったので、これからは、発言と比べて自分の意見を言うことをしたいと思います。

〔児童Fア〕 ぼくは、「応じて話す」ことが少ししかできていないので半分以上の「応じて話す」がしっかりできるようにしたい。

図15 児童が話し合いカード④に書いた内容

7.4 第4次 自己認識（1時間）

第4次の学習指導は、児童が学習全体を振り返って話し合いについて学んだことを認識し自己の成長を自覚することを目標に、話し合い学習のまとめを行った。

まず、第2次第1時に話し合い学習が終わるまでの課題としておいた図10の「話し合う力」の3つの柱の1つ目の要素について話した。図10の空欄に入る言葉を予想させると、「心」「気」などの「情」と近い意味の言葉が出された。図16のように空欄に情意的要素の「情」と話し合いに対する「関心・意欲・態度」を入れ、「話し合う力」の大切な要素であることを児童に確認した。

次に、「応じて話す」ために必要な思考力についてまとめた。話し合いの中で友達の意見に反対意見を述べることができないう児童や、話し合い後の振り返りの中に、自分の意見を反対されるのはいやだという感想を書いた児童がいたことから、批判的思考の大切さについて強調して指導した。さらに、「聞く力」と「話す力」の関係図を使って、「応じて話す」ための聞き方、話し方について確認した。

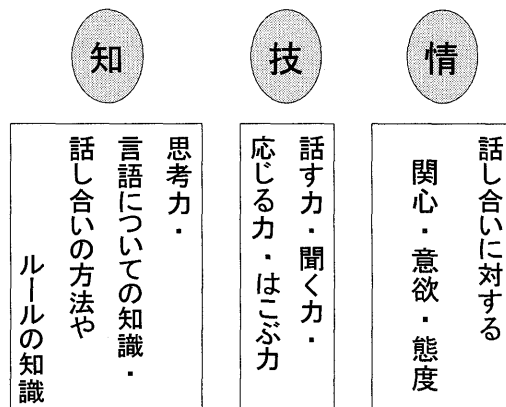


図16 「話し合う力」

その後、話し合い学習全体を振り返って、自分や友達、「応じて話す」こと、「話し合い」について、分かったことや成長したと思うことを学習カード③にまとめさせた。これまで

に使った学習カードや評価カードを見て、以前の考えや思いと比べながら振り返るようにした。これと並行して、電子掲示板を使って、自分が学んだことや成長したと思うことについて友達と意見交換を行わせた。児童は、友達の学びや成長を知ることにより、さらに自分の考えを深めることができた。

8 まとめと課題

本研究では、小学校国語科の話し合い学習指導において、児童の「応じて話す力」を育てるため、社会的構成主義の考えに基づいた学習の流れで授業を計画し、認知科学のスキーマ理論を取り入れた新しい学習方法を組み込んで授業実践を行った。

授業実践の結果、得られた知見を以下にまとめる。

- ・図5に示した話し合い学習の流れにより、話し合いが苦手な児童も学習に参加し、話し合うことの意義を認識し、話し合いに対する意識を高めることができた。
- ・「応じて話す力」を図6のような「聞くこと」と「話すこと」のスキーマで捉えたことにより、話し合いで何を話してよいか分からない児童や、話し手の発言に関連したことを話せない児童の思考を助け、話し合いでの発言を支援することができた。
- ・「聞くこと」と「話すこと」のスキーマをもとに、児童が自分にとって必要な話し合う力を明確にし、それを身に付けることを目的に学習を行うことができた。
- ・「聞くこと」と「話すこと」のスキーマを形成するために考案した図7のワークシートは、話し合いでの発言内容をつくり出す思考過程と結びつけた点が画期的であるが、スキーマをより確かに形成できるものに改良する必要がある。
- ・電子掲示板による振り返る活動は、「応じて話す」ことへの理解を促す場となる効果が認められた。
- ・電子掲示板を使った学習は、話し合い学習指導においても、児童間の相互作用を促すとともに、児童の学習に対する興味、関心を引き、学習意欲を持続させる効果が認められた。

本研究で育てる「応じて話す力」は、どんな話し合い場面にも通用する生きてはたらく話し合う力である。今後は、本授業で身に付けた「応じて話す力」を国語科に限らずいろいろな話し合い場面で活用し、継続して扱いつつながら定着させていくことが大切である。また、「聞くこと」と「話すこと」のスキーマを、児童一人ひとりの能力に応じた指導に役立てることや、児童が自分のための評価基準を作って評価することに活用する方法も考えられる。

今後の課題としては、「聞くこと」と「話すこと」のスキーマを形成するために考案したワークシートを、スキーマがより確かに形成されるものに改良することや、「応じて話す力」を評価するためのチェックシートを児童が適切な評価を行えるものに改良すること等が挙げられる。

〈参考文献〉

- 石川等 2000 「生きてはたらく国語の力を育てる授業の創造」刊行会編 伝え合う力を育てる「話し合い」の学習指導：「話すこと・聞くこと2」 ニチブン
- 文部省 1999 小学校学習指導要領解説国語編 東洋館出版社
- 村松賢一 2001 対話能力を育む話すこと・聞くことの学習—理論と実践— 明治図書
- 正司和彦 2004 探求と知の共有化のための授業実践とこれを支援する分散協調学習環境の開発 平成14年度～平成15年度科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）研究成果報告書 pp.1-2